

夏安居での気づき

明治大学教育会長 田中 徹太郎

この文章は、一燈園中学校・高等学校での令和元年7月26日～28日夏期学校大愚塾「夏安居」に筆者が参加し、授業奉仕をなし、子供たちと共に作務・瞑想にいそしんだ体験から気づいたことをしたためたものである。夏安居（げあんご）とは、元々仏教用語で、夏に僧侶が室に籠って修行をすること。一燈園「夏安居」は13回目、学習講座・講話・キャリアガイダンス・作務・瞑想で学び、「気づき」を尊ぶ。

西田天香さんが、北海道亜麻製造株式会社における、労使対立の板挟みで苦衷を舐めたのは、1896年（明治29年）の事であった。日清戦争に勝利し「たけくらべ」が書かれ、金本位制がスタートした時代でもあった。「近代資本主義」の揺籃期である。

マルクスは、1883年にすでに亡くなり、エンゲルスは1895年まで生きていた。古典派経済学では、ワルラスが登場しジェボンズ、メンガーと共に数学的手法を駆使した分析を始め「限界革命」を引き起こす。限界効用：満足度が価格を決めるとし「労働価値説」を退けた。満足度：快楽や苦痛が尺度となり、「欲望」が価格決定の表舞台に登場したのである。このムーブメントを嚆矢とし経済学は、「多変数の相互連関モデル：システム」を中枢となすが、維摩経の「全ては関係性の中で成立し、全ての存在は集合体であり、変化し続ける」と同一線上にある。

労使対立は、「近代資本主義」の負の部分より生ずる「格差の発生」「奢侈的欲望の無意味な拡大」や古典派経済学の「セイの法則」：供給重視から生じた。

アダム・スミスが喝破したように「分業」のみが、社会生産を飛躍的に拡大する。それまで基本的な自由（享受と消費の自由）すら持たなかった人間に「自由」を拡大する正の部分が当時未発達であった。

分業による収入で消費が拡大する相互連関モデルにより、人々の格差が縮小していく。資本主義の経済的自由競争のシステムは、「自由」をいかに確保するかが要諦となる。マルクスの主張する「私的所有と自由競争の禁止」は、結果的に権力の「自由の抑圧」となり、やがて命運を絶たれていく。

1900年（明治30年）ニーチェを本邦に紹介したのは、登張竹風：東京高師（現筑波大）教授である。西田天香さんが大否定の底を通じて「われ世に克てり」「無為の動作が自然法爾に他人の行為をひきしめ、あぶない家が建つ」と二重の勝利に新生活の産声を挙げた5年前。ニーチェは、カントの物自体（完全な世界は神のみが認識している）を否定し：本体論を解体、認識を対象物（カオス）と生き物の「身体・欲望・生・力」：（エロス）の相関性として把握した。エロスを前面に出す。肯定して、肯定して、肯定して～。認識とは、実在や事実の認識であるより前に「意味」や「価値」の形成、変化（生成）とした。残念ながら彼に相互連関のシステムの概念はない。

人間の根幹にあるエロスに二人は注視した。ニーチェは、「よし!人生が無意義ならば、私はそれに一つ意義を与えよう!自ら生き甲斐ある人生を作ろう!もう一度と喜び迎えるに値するような人生を造ろう!斯様な生活ならば、幾度繰り返されても、永久に繰り返されても望ましいと思うような人生を作ろう!」客観を無意味化し、「究極の自己肯定」をなし屹立した。

天香さんは下座し、自我・エロスをゼロポイント化し、否定して、否定して、否定して～伏して所有欲・優越欲を排した。

マックス・ヴェーバーは、「近代資本主義は、利益を求めない地で発達した」とし、「資本主義の精神」の醸成した地では近代資本主義が発達したと主張した。その中核は、利潤を目的とした行為ではなく、顧客の満足のみを満たすことに汗を流して得られる、「結果としての利潤」の尊さをプロテスタンティズムが正当化したことにある。行動的禁欲～今、ここで労働になりきること～により、天職から得られたこの利潤を受け取っても構わないとし、近代資本主義の発達にドライブをかけた。顧客との相関で利潤が生まれることに注視し、労働を神聖化し、経営の動機の質を問い、エロスに制御をかけたのだ。

フロイトの深層心理学説は、実証の無さが批判され、精神分析の治療の有効性についても大きな異議があるのが現状だ。しかし、人間の心の意識されえない「構造」を取り出したことに彼の真価がある。人間のエロスは、本質的にその形成過程をほとんど意識できない。本質的に「無意識」である。この発想は、欧州の現代思想に多大な影響を与え、社会についても、その表れの背後に意識できない「無意識な構造」が隠されているとの視座が共有された。

ヴェーバーの「資本主義の精神」もまた「無意識な構造」である。「一燈園の無所有の清規」「宣光社の仮所有の規範」とヴェーバー「資本主義の精神」には、「緩やかな構造的同一性」がある。

維摩経は、二項対立の愚かさと自らの修行の完成に籠る仏者に、社会性や他者性を問うた経典である。「煩惱を絶たずして涅槃に入る」聖なる世界は俗なる世界から離れていない。想起される桃水和尚の生涯。蓮を育てるのは、泥だ。煩惱が無ければ悟りもない。「聖者になる為の乞食行にあらず。全ては関係性の中にあり。施す人のための乞食行でもある」今、この場がどれほどの関係性で成立しているかを見抜く。時は瞬間しか実在しない。今ここになりきる。「この世に不滅の実体はない」無我：絶対なる神や永遠の靈魂などない。「空」は実体論の解体のこと。「物自体の解体」は本体論の解体にあり。「空」は自身の体系を否定する構造を内包する。脱構築は、ここを濫觴とする。

一燈園は、現実の生活を生きるところに立脚する、維摩詰を先駆者としている。絶対者も経典も存在せず、ドグマも戒律もない。汗と祈りと学習による自らの気づきのみ。であれば、宗教ではない。維摩詰は、「空」で仏教の体系を破壊した。彼は哲学者であった。仏教は哲学に違いない。

現代の社会では、個我の生命力を高め、他者との「緩やかな構造同一性」を紐帯とする。併せて地域や国々の「構造」の束から柔らかなルールを実証するだけでなく、人々の喜び

や悲しみを相互承認する。こうした意味理解を通じて、共存することは、人類の知恵が希求してきたものである。身体・欲望・力：エロスの力動は、個我を成長させ、顎をあげ胸を張る生命力をより逞しくした。

しかし、人類は、その誕生とともに原初的に極めて過剰なエネルギーを有し、資本主義の発達とともに、その放埒さが拡大しコントロールできなくなっている。

一燈園の祈り・汗・学習は、黙が内省を深め、清掃の汗は喜びとなる。学習は、知見を広めるだけでなく、祈り・汗を土台として「気付き」を生む。過剰なエネルギーは、社会が求めている方へ静かに向かい、自利利他となる。

「拝育」は、生命への畏敬の念より生じ、下座を母とする。相大二郎さんの足の裏こそが父である。教育の原点ここにあり！

「一燈園には雄弁はいりません。また他を教えるというような態度を取らぬ。賢者の地位でなく、愚者となって教えられるものであると思うてよい。」

～「懺悔の生活」：西田天香～

第13回一燈園夏期学校 大愚塾「夏安居」報告集掲載